

**BIOMEDICAL
RESEARCH
ON
TRACE ELEMENTS**

Vol.17 No.4 2006



**Japan Society
for Biomedical Research
on Trace Elements**

第 17 回日本微量元素学会を終えて

The 17th Annual Meeting of the Japan Society for Biomedical
Research on Trace Elements

第 17 回日本微量元素学会会長 荒川 泰昭

第 17 回日本微量元素学会は 2006 年 7 月 12 日(水)、13 日(木)、14 日(金)の 3 日間、静岡のグランシップ GranShip (Shizuoka Convention & Art Center) (JR 東静岡駅前)において開催された。学会運営のために 12 の会場が使用された。会期中は梅雨や台風の合間の貴重な晴天にも恵まれ、3 日間の記念市民公開講座ならびに学術大会に 1000 名を超える多くの参加者があり、レベルの高い研究発表と活発な質疑応答が展開された。第 1 日目は中ホール(第 1 会場)において市民公開講座が開催され、第 2 日目ならびに第 3 日目は第 1 会場、第 2 会場、第 3 会場、第 4 会場の 4 会場を同時使用して学術大会が開催され、会員にとって、将来の研究展開における情報交換やアイデア収穫の場、そして親睦の場となった。



写真 1. 荒川泰昭大会会長

本大会では、主要テーマを①「生体機能(免疫、脳神経、内分泌)と微量元素－生体機能の栄養・毒性・制御・調節・障害－」、②「疾病発症ならびに臨床・診断治療と微量元素」、③「生体元素の体内恒常性の攪乱と症状発現」、④「微量元素の有効性と安全性－薬効・栄養・毒性の探索ならびに検証－」とし、特別演題としては市民公開講座「サプリメントと健康－薬食同源と微量元素－」において特別講演 4 題、学術大会において特別講演 3 題、教育講演 2 題、フォーカス講演 2 題、トピック講演 5 題、シンポジウム講演 10 題、受賞講演などが行われた。また、募集演題としては 55 題の講演が 3 会場同時進行で行われた。

第 1 日目

午後 1 時より本大会の記念事業として、市民公開講座「サプリメントと健康」－薬食同源と微量元素－が開催された。現在、サプリメントは市民の生活の中に急速に拡大し、一般生活だけでなく医療の領域においても種々の効果を挙げているが、逆に誤った使用による種々の問題も生じている。そこで今大会では、健康への「サプリメントの功罪」を取り上げ、外科、内科の医療現場をはじめ、総合的かつ国際的な面から将来におけるその有用性と安全性について県民と共に考える機会を提供した。

第一部では、「薬剤ならびにサプリメントによるミネラルの保健・予防・治療への処方」をテーマに、「いきいき生活と亜鉛－その深～い関係－」と題して富田寛先生(日本大学医学部耳鼻咽喉科学名誉教授)が、

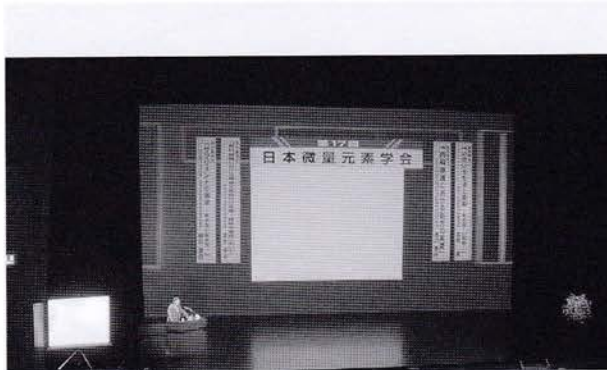


写真 2. 主会場ステージ風景(市民公開講座)



写真 3. 会場風景(市民公開講座)

「内科領域における処方の実際」と題して荒川泰行先生(日本大学医学部消化器肝臓内科部門教授)が、また「外科領域における微量元素処方の実際—静脈栄養時において」と題して高木洋治先生(甲子園大学栄養学部大学院栄養学研究科、大阪大学医学部名誉教授)が講演された。

第二部では、「サプリメントの展望—有効性と安全性—」と題して細谷憲政先生(厚生労働省(財)日本健康・栄養食品協会理事長、東京大学医学部名誉教授)が講演された。

学会がもつ知識を一般社会に理解・浸透させ、日常生活に活用してもらうことを目的とした開催であったが、450名を超える多くの参加者があり、県民ならびに会員の皆様からも「有意義で有益な会」であったと大好評を得た。また、官庁ならびに新聞社や雑誌社、NHKなどのテレビ会社から取材や問い合わせも多くあった。

第2日目

第1会場、第2会場、第3会場、第4会場の4会場を同時使用して学術大会が開催された。午前中は5題のトピック講演と7つのセッションに分かれた22題の講演が行われた。トピック講演では、トピックス「微量元素研究—若い力—」と題して、「動物細胞におけるカドミウム輸送の分子メカニズム」(藤代瞳・徳島文理大薬助手)、「セレンタンパク質の生合成とセレン特異的酵素」(三原久明・京都大化研助手)、「抗糖尿病作用を有する亜鉛およびバナジウム化合物による α -グルコシダーゼの阻害と作用機構」(吉川豊・京都薬科大助手)、「分析毒性学からみたヒ素の代謝機構」(小林弥生・国立環境研)、「核内受容体リガンドとしての有機スズ化合物とその毒性」(中西剛・大阪大薬助手)など、新進気鋭の若手の研究者5氏による最前線の研究が紹介された。

午後からはフォーカス講演2題、教育講演2題、特別講演2題が行われた。フォーカス講演では、現在社会問題となっている「アスベストと中皮腫」—発症の基礎と臨床の実際—をテーマに、「アスベスト関連発癌と免疫影響」と題して大槻剛巳先生(川崎医科大学衛生学教授)が、「悪性中皮腫：頻度と臨床的アプローチ」と題して中野孝司先生(兵庫医科大学呼吸器内科学教授)が講演された。教育講演では、教育講演Ⅰ「住民調査にみる高齢者の亜鉛不足と亜鉛補充療法」と題して倉澤隆平先生(東御市立みまき温泉診療所顧問)が医療現場から、また教育講演Ⅱ「銅の体内動態と疾病」と題して児玉浩子先生(帝京大学医学部小児科学教授)が臨床における基礎的研究から、それぞれ示唆に富んだ講演をされた。特別講演では、特別講演Ⅰ「微量元素と眼組織—形態的研究—」と題して雨宮次生先生(長崎大学医学部眼科・視覚科学分野名誉教授)が、特別講演Ⅱ「金属アレルギーの発症機序」と題して池澤善郎先生(横浜市立大学大学院医学研究科環境免疫病態皮膚科学教授)がそれぞれ総説的に示唆に富んだ講演をされた。

夜には、JR 静岡駅前ホテルアソシアにて懇親会が開催された。プロの司会と静岡県立大学の吹奏楽団(25名)の演奏に始まり、地魚、桜エビ、白魚など駿河湾産の魚介類やはんぺん、静岡おでん、地酒など、静岡名物を味わいながら夜が更けるまで歓談が続いた。



写真4. 主会場ステージ風景(学術大会)

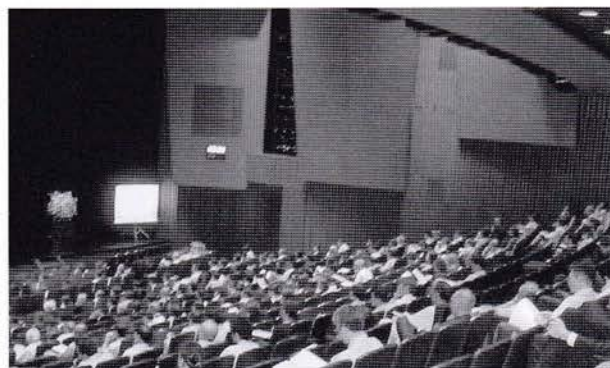


写真5. 会場風景(学術大会)



写真 6. 記念写真

第3日目

第2日目と同様に、第1会場、第2会場、第3会場、第4会場の4会場を同時使用して学術大会が開催された。午前中は2つのシンポジウムⅠ、Ⅱと特別講演Ⅲが行われた。シンポジウムⅠでは、「臨床における亜鉛の有効性の探索」をテーマに5題の講演がもたれ、「亜鉛の生理」(柳澤裕之・埼玉医科大教授)、「味覚障害と亜鉛」(池田稔・日本大医教授)、「消化管疾患と亜鉛」(大高道郎・秋田大医講師)、「肝疾患と亜鉛」(森山光彦・日本大医助教授)、「皮膚疾患と亜鉛」(山崎雙次・獨協医科大教授)と題して、5つの領域から臨床における亜鉛の新規有効性が紹介された。シンポジウムⅡでは、「微量元素の新規毒性の探索」をテーマに5題の講演がもたれ、「受動喫煙と血中鉛」(加治正行・静岡市保健福祉局)、「セレノメチオニンの解毒代謝」(奥野智史・摂南大薬助手)、「シナプス小胞亜鉛と細胞死」(武田厚司・静岡県立大薬助教授)、「有機スズとインボセックス」(堀口敏宏・国立環境研)、「アルミニウムと細胞死」(川原正博・九州保健福祉大薬教授)の5つの領域における新規毒性に関する知見が紹介された。特別講演Ⅲでは、「金属薬剤の開発と医療への応用」と題して佐治英郎先生(京都大学大学院薬学研究科病態機能分析学分野教授)が総説的に示唆に富んだ講演をされた。

午後からは、総会における受賞講演と10のセッションに分かれた33題の講演が行われた。受賞講演 研究学術賞(浜理薬品賞)では、「ヒ素の毒性および薬理作用の分子機構の解明・ヒ素のケミカルバイオロジー」と題して櫻井照明先生(徳島文理大学薬学部助教授)が講演された。

以上、講演内容を中心に3日間の学会の様態を報告させていただいたが、本大会は、抄録集の英語化、Web siteの活用、若手の育成などをスローガンにし、オンラインによる演題登録から抄録集作成そして大会運営に至るまで、すべて手作りにさせていただいたので、行き届かない面も多々あったことと思うが、ご容赦願いたい。最後に、学会開催に当たり多大の協力を賜った役員諸氏ならびに参加者、ご支援を賜った諸団体・企業にこの場を借りて深く感謝申し上げたい。

追記：

本学会の幹事や各委員など運営にご協力いただき、若手のホープの一人でもありました櫻井照明君が9月15日に急逝されました。ここに深く哀悼の意を表しますと共に、謹んでご冥福をお祈りいたします。

今大会においても、トピックス講演「微量元素研究—若い力—」の企画を担当していただき、若手研究者を大いに啓発していただきました。また、本年度の研究学術賞(浜理薬品賞)を受賞したばかりでした。9月14日、15日に倉敷で開催された第13回日本免疫毒性学会に参加中、15日の早朝、ホテルにて急逝されました。前日の夜まで行動を共にしていただけに信じ難く、また今後益々ご活躍が期待されただけに残念でなりません。学会を代表し、葬儀にも参列させていただき、ご冥福をお祈りいたしました。